

中世末期～近代における上方語・大阪方言の「一オル」「一ヨル」 一人称に着目して— 西谷龍二

現代大阪方言において一ヨル（「一」は活用形の連用形を指す）という形式はマイナスの待遇を示す卑語形式として使用されている。この一ヨルは補助動詞一オルが変化したものであり、一オルは中世末期頃から卑語として用いられることが知られている。この卑語の性質を一ヨルは受け継いでいるものと考えられている。一方、両者の間に変化があることも指摘されている。金水敏（2006）（『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房）では、中世末期の一オルは上位者から下位の二人称に対して盛んに用いられるのに対し、現代大阪方言の一ヨルは三人称しか主語に取ることができないという人称制限が生じていることを指摘する。しかし金水（2006）はこのような現象の指摘に留まっており、その変化を実証的に示しているわけではなく、変化の様相やその変化の要因等については明らかになっていない。そこで本発表では、中世末期から近代における上方語・大阪方言の資料をもとに、一オル・一ヨルの取りうる人称について通時的に調査を行い、その結果について述べる。

調査の結果、中世末期・近世前期には金水（2006）の指摘のように、二人称に対して盛んに使用されていた。しかし、近世後期・幕末期には三人称への使用が増加し、近代以降、三人称に使用がほぼ限定されるという状況が明らかになった。また上方語・大阪方言において用いられる一ヤガル・一クサルなどの他の卑語形式と比較したところ、一ヨルの人称が三人称に限定される近代以降の資料においても、他の卑語形式は二人称にも使用されており、人称制限は一オル・一ヨルのみに生じている現象であることが確認された。

このような人称制限が生じた要因の1つとして、辻加代子（2017）「方言敬語への新視点—第三者敬語の用法に注目して—」（『日本語学』36-6）で指摘されている近畿方言の第三者待遇の体系の成立が関係している可能性を指摘した。